人文・自然・人間科学研究　No. 50, pp. 1–23　　October 2023

カントの『オプス・ポストゥムム』における エーテルの演繹論について

── 知覚と体系的経験のあいだ ──

犬　竹　正　幸

On the Theory of the Ether-Deduction in Kant's Opus postumum:

Between the Perception and the systematic Experience

Masayuki INUTAKE

要　旨

本論考で筆者は，カントが晩年に書きためた遺稿集『オプス・ポストゥムム』のテーマが，経験の体系的統一を可能にする質料的条件の究明にあったとする解釈を提出する。カントによれば，物質の種別的差異を成り立たせる諸々の経験的運動力が，単なる寄せ集めではなく一個の体系を形成するためには，それら一切の経験的運動力がそこから派生すべき，根源的元素（エーテル）の存在が要請されねばならない。エーテルは従来，熱や光を伝える媒体として想定された自然哲学上の仮説であったが，カントはここで，エーテルを（体系としての）経験の可能性のアプリオリな（質料的）条件として資格づけたことになる。この資格づけの正当化を図った論証が「エーテルの演繹」に他ならない。カントはそこで，空虚な空間の知覚可能性如何の問題と関連づけてエーテルの存在論証を行っている。筆者はこの存在論証を首尾一貫したものとみなす解釈を提示したが，批判哲学の体系的整合性の観点から見たとき，この論証は重大な問題を後に残したと考えられる。

キーワード：エーテル（熱素），経験の体系的統一，汎通的規定，身体的主観

はじめに

『オプス・ポストゥムム』は晩年のカントが書きためた全部で 13 の原稿の束からなる遺稿集であり，後にアカデミー版カント全集の第 21 巻と第 22 巻に収められたものである。その総量はアカデミー版のページ数にして，じつに 1200 ページに及び，一通り目を通すだけでも相当，骨の折れるものであるが，『オプス・ポストゥムム』の内容を理解するにあたっては，その量の膨大さ以上に，厄介な問題がつきまとう。まず 13 の原稿の束に付された番号はまったく便宜上のもので，執筆順序を示すものではない。論述

内容から執筆順序を推定しようとしても，再三にわたって同一のテーマが繰り返されるかと思えば，突如まったく別のテーマが論じられたり，一文が途中で中断されることもしばしばである。そのため，『オプス・ポストゥムム』の専門の研究者のあいだですら，執筆順序に関して完全な意見の一致が未だ見られないありさまである。とはいえ，『オプス・ポストゥムム』の本格的な研究の道を切り開いた E. アディッケス，アカデミー版の編者 G. レーマン，近年では B. トゥシュリンク，さらにはケンブリッジ版カント全集の『オプス・ポストゥムム』の編者 E. フェルスターらの尽力により，執筆順序に関しては，ほぼ確定されたと言ってよい。しかし，それでは『オプス・ポストゥムム』でカントは一体，何を問題とし，いかなる哲学的思索を展開しようとしたのか，という内容面の理解に関しては議論百出の状態で，定説と呼べるような解釈は未だ確立されていないのが現状である。

それでも近年，欧米では『オプス・ポストゥムム』の翻訳版が相次いで公刊されたことと相俟って，『オプス・ポストゥムム』に関する本格的な研究が活発化している。これに対して我が国では，なんらかのかたちで『オプス・ポストゥムム』に踏み込んだ研究は，三宅剛一や坂部恵といった少数の碩学の手になるものを除いては，ほとんど見られず，『オプス・ポストゥムム』を正面から論じた本格的な研究にいたっては皆無である[(1)]。

筆者はすでに四半世紀前，「純粋自然科学と経験的自然科学のあいだ ──『自然科学の形而上学的原理』から『オプス・ポストゥムム』へ ──」というタイトルで『オプス・ポストゥムム』を論じたことがあるが，本稿の基本的な立場は四半世紀前のそれと変わってはいない[(2)]。ただ今回は，『オプス・ポストゥムム』のほぼ中盤に位置する「エーテルの演繹」論に焦点を合わせることによって，この演繹論が『オプス・ポストゥムム』の重要な転回点となった次第を考察してみたい[(3)]。

一　『オプス・ポストゥムム』のテーマについて

カントは『オプス・ポストゥムム』で何を論じようとしたのか。それは，比較的初期（1796 年頃）に書かれ，一定のまとまりのある内容をもった「八折判構想」（Oktaventwurf）（XXI 373ff.）と呼ばれる草稿群から読み取ることができる。そのタイトルは「自然科学の形而上学的原理から物理学への移行」（ibid.）というものである。カントはすでに 1786 年，その名も『自然科学の形而上学的原理』（以下，『原理』と略記）という，批判哲学にもとづいた自然哲学的著作を刊行している。したがって上記のタイトルからは，『オプス・ポストゥムム』が『原理』との密接な関係のもとに構想されたものであることを明白に読み取ることができる。

さて，この点を念頭に置きながら「八折判構想」のタイトルに続く冒頭部を見ると，次のように書かれている。

> 物質一般がそれによって可能となる運動力から，物質に特定の……結合を与える運動力へ〔の移行〕。
> 1. 密度　2. 凝集　3. 凝集する諸部分相互の運動可能性あるいは相対的な運動不可能性（ibid.）

ここで「物質一般がそれによって可能となる運動力」とは，『原理』の動力学章において，物質の本質をなす「不可入性」ないし「空間充実」を成立させるアプリオリな根本力として論証された「根源的な引力・斥力」を指す。これに対して，「物質に特定の結合を与える運動力」とは何か。それは，上記の「凝集する諸部分相互の運動可能性」が物質の「流体性」（Flüssigkeit）を意味すること，また，それらの「相対的な運動不可能性」が「固体性」（Festigkeit）ないし「剛体性」（Starrheit）を意味することを踏まえた上で言えば，密度や凝集，流体性・固体性といった，物質がその種別に応じて異なった様相を示す基本的な物理的諸性質，そうした物理的諸性質を与える諸々の運動力に他ならない。要するにカントは，「物質に特定の結合を与える運動力」でもって，物質の種別的差異を成り立たせるさまざまな経験的運動力を考えているのである。そして，経験的に知られるこうした諸々の運動力に関する体系的な認識が，カントの考える「物理学」（Physik）に他ならない。

ところでカントは『原理』のなかで次のように述べている。

> われわれは物質一般という普遍的な概念を可能ならしめる諸条件〔の考察〕という一線を踏み越えて，物質の特殊な規定や差異を，ましてや物質の種別的な規定や差異をアプリオリに説明しようなどと企てることがないように用心すべきである。
> （IV 524）

この一文から明らかなように，『原理』は「自然の形而上学」として，「物質一般」の可能性の条件の考察に自らを限定すべきであり，物質の種別的な差異を説明するという問題は，経験的な自然科学としての物理学があつかうべき問題であるとカントは考えている。

こうして「自然科学の形而上学的原理」および「物理学」が，それぞれあつかうべき内容は明らかとなった。しかし，前者から後者への「移行」（Übergang）ということが，なぜ問題となるのか。自然科学の形而上学的原理が与えられたならば，ただちに特

定の種類の運動力についての経験的認識としての物理学へと向かって，なんら差支えないようにみえる。それが許されないのはなぜなのか。この問題こそが『オプス・ポストゥムム』のテーマである。この問題を考えるにあたり，『オプス・ポストゥムム』への助走とも呼べる内容が，『原理』の動力学章の末尾に付された「動力学に対する総注」に見られるので，次に前掲の拙論の内容を振り返りながら，この「総注」の概要を見ておこう。

二　「動力学に対する総注」の概要

まず，カントの言う「動力学」（Dynamik）が何を意味するかを明らかにしておきたい。動力学は通常，物体系の平衡状態に関与する力をあつかう静力学に対して，物体の運動と力の関係をあつかう学を意味するが，カントの場合，動力学は，そうした自然科学上の分類に先立った，自然哲学の観点から考えられている。カントは物体的自然に関する二つの説明体系として，「機械論的自然哲学」（IV 532）と「動力学的自然哲学」（ibid.）とを挙げ，前者を否定して後者を採用している。機械論的自然哲学は，物体的自然のあらゆる事象を基本粒子のかたち，大きさ，剛性，運動に還元して説明し尽くすことをめざし，とりわけ，力の概念をすべて派生的なものとみなして，これを基本粒子の運動に帰着させようとする学説である。デモクリトス以来の原子論とデカルトの「粒子哲学」がその代表である（vgl. IV 533）。

これに対して動力学的自然哲学は，運動に先立って物質に内在する能動的な力，すなわち「動力学的な力」（IV 550）の概念を基本とし，自然現象や物質の内部構造を，そうした力にもとづいて説明しようとする学説である。カントはこうした動力学的な力として，ニュートンに由来する根源的な引力・斥力の概念を採用するが，運動に先立って物質に能動的な力が内在するという動力学の発想自体はライプニッツに由来する[(4)]。

さて，カントはこうした意味での動力学を，まず『原理』本論の第二章に配し，そこで物質一般がもつ普遍的な規定である「不可入性」ないし「空間充実」を成立させる動力学的な力として，根源的な引力・斥力をアプリオリに論証した。このように，『原理』本論のなかの動力学は，物質一般の本質ないし「自然本性」のアプリオリな規定に携わる学として，「形而上学的動力学」（IV 523）と呼ばれる。では，これに対して「動力学に対する総注」では何が問題となっているのか。

この「総注」のなかでカントは，「自然科学のあらゆる課題のうちでもっとも重要なものは，無限にまで可能な物質の種別的差異をどう説明するか，という課題である」（IV 532）と述べ，さらに続けて，この「物質の種別的差異を，引力と斥力という物質に根源的に備わっている運動力にもとづいて導き出す説明方式は，動力学的な自然哲学

と呼ぶことができる」（ibid.）と述べている。つまり，物質の種別的差異を諸々の運動力の多様性に求め，このような運動力の体系を構築することが動力学的自然哲学の最重要課題である，とカントは主張しているわけである。これは明らかに形而上学的動力学の範囲を超えた，〈経験的な動力学〉としての物理学の課題であろう。そこで「総注」では，そのための準備として，「物質の種別的差異がアプリオリにそこに帰着すべき諸契機」（IV 525）が提示される。カントがそこで挙げているのは，「密度」「凝集（力）」「弾性」「溶解」の四つである。これらが，上述した「八折判構想」のなかで物質の「特定の結合」として示された三つの項目とほぼ同一のものであることを，まず確認しておきたい。すでにこれだけで，「総注」と『オプス・ポストゥムム』における問題意識の連続性を明瞭に見てとることができる。それはともかくとして，これらの諸契機は「物質の普遍的性質」（IV 526）とみなされるが，「経験がいたるところに示す」（ibid.）ものとして，どこまでも経験的な性質ないし力である。そして，これらの項目の下に物質のより具体的な性質を分類することにより，物質の種別的な差異を求めようとするのが，「総注」におけるカントのさしあたりの狙いであろう。

ところでカントは，これら四つの性質について，「これら諸契機の可能性を理解することはできなかった」（IV 525）と語っている。つまり，カントは『原理』の時点では，この四つの性質を根源的な運動力から導き出すという作業を，さしあたり保留している。たとえば「凝集力」は「接触的引力」（IV 526）として，物質の諸部分の接触という条件を必要とする力であり，こうした条件を欠くかぎり凝集力は成立しない以上，「このような接触的引力は物質のいかなる根本力でもなく，単なる派生力とみなされる」（ibid.）ことになる。だとすれば，この派生力としての凝集力をなんらかの根本力から導出し説明するという仕事が動力学に課されるはずであるのに，カントはこれを行っていない。ちなみに，物質一般の可能性を構成する根源的引力から直接，この凝集力を導き出すことはできない。なぜなら，この根源的引力は「遠隔作用」（IV 512）として，接触という条件とは無関係に作用し，したがって，接触部分が分離されるや，ただちに消滅する凝集力とは異質な力だからである。経験的動力学としての物理学に対する準備としての「総注」の暫定的な性格は，ここに明らかである。

ただし，「弾性」および「溶解」に関する論述中に，『オプス・ポストゥムム』との関係から見て，非常に注目すべき概念が登場する。「熱素」および「エーテル」の概念がそれである。熱素については「派生的弾性」としての気体弾性の原因として，またエーテルについては，その引力に比してきわめて大きな斥力をもつ，空間を充実する希薄な流体として，いずれも仮説的な物質として言及されているだけである。しかし，ここにはきわめて限定的であるとはいえ，物質の基本性質を熱素あるいはエーテルの作用から導出し説明しようとする意図が，すでに見られるのである。そこで次に，熱素およびエー

テルに関するカントの理解を簡単に見ておこう。

三　熱素およびエーテルに関するカントの理解

熱素の理論は科学史的には，燃焼の現象を可燃物に含まれているフロギストン（燃素）の放出として捉えるシュタールのフロギストン説を克服するために，ラヴォワジェが提唱した理論として知られているが，『オプス・ポストゥムム』以前のカントが理解していた熱素概念は，ラヴォワジェの熱素理論とは無関係のようである。というのも，ラヴォワジェの化学理論が完成したのは 1780 年代とされているのに対し，カントはすでに 1755 年の論文『火について』のなかで「熱素」に言及しており，しかもそれを「燃素」と同一視し，さらにはそれらを「エーテル（すなわち光素）」（I 377）と同一視しているからである。つまりカントはここで，熱，燃焼，光という自然現象が同一の物質的実体（これが結局，「エーテル」と呼ばれる）を担い手として生じるものであり，それぞれの現象に応じて「熱素」「燃素」「光素」という名で呼ばれるのだと考えているわけである。それどころか，カントは 1787 年に刊行された『批判』第二版にいたってなお，その序文中でシュタールの名を肯定的に挙げてフロギストン説を支持していた（vgl. B XII）。ラヴォワジェの名が公刊著作中に登場するのは，ようやく 1797 年の『人倫の形而上学』および，その翌年に公刊された『実用的見地から見た人間学』においてである（vgl.VI 205, VII 326）。また『オプス・ポストゥムム』のなかではラヴォワジェの名こそ見当たらないが，「おそらく水は二種類の空気に（すなわち可燃性空気〔今日の水素〕と純粋な生命空気〔今日の酸素〕とに）分解することができるのだろう」（XXII 401）という，ラヴォワジェが初めて解明した水の分解と合成に関する一文があり，これはラヴォワジェの理論をカントが多少なりとも承知していたことを窺わせるものである。とはいえ，『オプス・ポストゥムム』全体を通じて見られる熱素とエーテルとを同一視する傾向は終生，変わらなかったようである。

カントのエーテル概念の理解に関して，もう一点，述べておきたい。カントは『オプス・ポストゥムム』において，温度変化，気体弾性，流体性・固体性および，その一方から他方への状態変化としての凝固，融解，気化，あるいは光の伝播，さらには毛細管現象にいたるまで，力学的現象以外のありとあらゆる現象を熱素ないしエーテルの「振動」のはたらきに帰着させようとする説明を繰り返し試みている。この熱素ないしエーテルの振動という考えは，上述した『火について』のうちにすでに見られる。そこには，ニュートンの光の粒子説に対して，宇宙空間を充たすエーテルの振動の伝播として光を捉える光の波動説を唱えたオイラーの名も挙げられている（vgl. I 378）。ただ当時のカントは一方で原子論的な物質観を抱いており（1756 年に公刊された『自然モナド論』

では，引力・斥力を備えた点原子を基本とする原子論的物質論が展開されている），光の媒質として宇宙全体をすき間なく充実する流体としてのエーテルという概念は，ようやく批判期の著作『原理』において，原子論が根本的に批判され，根源的な引力・斥力を備えた物質が（一定の）空間を完全に充実するという動力学的物質論が確立されるにいたって，その可能性が保証されることになった。そして，そのエーテル自身のもつ根源的な引力・斥力の相互作用にもとづく「振動」運動の結果として，上述したさまざまな自然現象を説明するというエーテル理論が，『オプス・ポストゥムム』で展開されることになるのである。

四　形而上学的な媒介の学としての「移行」

上述したように，『オプス・ポストゥムム』は基本的に『原理』の「動力学に対する総注」の問題意識の延長線上にあるといってよいのだが，『オプス・ポストゥムム』に対比して「総注」がまったく触れていない問題がある。〈経験的自然科学としての物理学がいかにして可能か〉という問題がそれである。『原理』の課題が「純粋自然科学はいかにして可能か」という問いの究明にある以上，『原理』の一部としての「総注」が，経験科学としての物理学の可能性を問題にしなかったことは，当然といえば当然であるが，カントは『原理』の時点では，この問題を真剣に考えていたようには思えない。その一年後に公刊された『批判』第二版においてさえ，この問題にはまったく触れていないからである。『オプス・ポストゥムム』は，まさしくこの〈経験的自然科学としての物理学はいかにして可能か〉という問題を正面に据え，この問題を究明する学として「自然科学の形而上学的原理から物理学への移行」という学を構想したのである。

しかし，『批判』は「経験一般の可能性」の条件を究明する学であり，また『原理』は「物質の客観的経験の可能性」の条件を究明する学である以上，ともに経験科学としての物理学の可能性に関わる学であるはずである。では両者があつかうことなく，『オプス・ポストゥムム』だけが論じている物理学の可能性に関わる問題とは何か。それは，物理学が一個の認識体系をなすべきであるという，学の体系性に関わる問題であり，そうした体系性を成り立たせる条件は何かという問題である。もちろん，『原理』も自然の形而上学として，一個の認識体系をなすべきものであるが，形而上学の場合，アプリオリな諸認識の体系性は，たとえばカテゴリーを手引きとして容易に実現可能であり，学の体系性がいかにして可能かは，それほど問題にはならない。これに対して物理学では，多様な経験的諸認識が一個の体系的統一をなすべきことが求められる一方で，経験にもとづくかぎりでは，諸認識の単なる「寄せ集め」（Aggregat）が生じるだけであって，けっして「体系」（System）を形成することはない，という事情がある。それゆ

えに物理学においては，〈経験的諸認識の体系的統一はいかにして可能か〉という問いが，物理学の存立に関わる根本問題として改めて立てられ，それに対する解答が求められることになる。カントがある知人に宛てた書簡のなかで，批判哲学には未だギャップが存在し，自分の「移行」はそのギャップを埋めることを任務としていると述べたことは，以上のような事態を指していると思われる[5]。

ところで，多様な経験的諸認識の体系的統一は，それら諸認識の（客観性の）形式に関わる統一ではなく，それらの内容に関わる統一である。すなわち，ある経験的諸認識が一つの全体としてのまとまりをもった分類体系や説明体系を形成しうるか否かは，諸認識の内容に関わる問題だ，ということである。したがって，〈経験的諸認識の体系的統一はいかにして可能か〉という問いは，その内容から見た経験の可能性の条件を，いいかえれば経験の可能性の「質料的条件」を問うことを意味する。『オプス・ポストゥムム』が「移行」という学の構想の下に試みているのは，こうした体系としての経験の可能性に関する質料的条件の究明に他ならない。これに対して『批判』の分析論および『原理』がその究明に取り組んだのは，経験一般の可能性の形式的条件，および物質の経験の可能性に関する形式的条件であった（ただし，後に詳論するように，『批判』の弁証論のうちに，体系としての経験の可能性に関する質料的条件を論じた一節があり，その内容は『オプス・ポストゥムム』を理解する上で重要な鍵を提供してくれる）。こうした形式的条件とは，いいかえれば経験一般の，あるいは物質の経験の，客観性を成立させる条件を意味する。『批判』も『原理』も，経験の可能性の形式的条件を究明することに専心し，質料的条件の究明にはほとんど踏み込んでいないが，それは両者が，認識の客観性を成り立たせる条件は何かという問いを主要テーマとしているからである。

このようにカントは『オプス・ポストゥムム』において，経験一般の客観性を成り立たせる条件とは区別された，体系としての経験の可能性ないし経験の体系的統一の可能性に関する条件を究明しようとするのであるが，この区別に関連して，経験の「配分的統一」（distributive Einheit）ないし「配分的普遍性」と，「集合的統一」（kollektive Einheit）ないし「集合的普遍性」との区別について頻繁に言及している[6]。たとえば次のような文言がそれである。

> それゆえ集合的に普遍的な経験の客観は……与えられるのに対して，配分的に普遍的な経験の客観は……単に思惟されるだけである。なぜなら，後者の客観はもっぱら可能的経験の形式に属するものだからである。（XXI 579）

ここで明らかなように，経験の配分的な普遍性（ないし統一）とは，判断のかたちで示されるような個々の経験に共通する客観性の形式を意味しており，その可能性の条件

とは，いうまでもなくカテゴリーである。これに対して，経験の集合的な普遍性（ないし統一）とは，その体系的統一を意味し，その可能性の条件は「与えられる」べきものとして，なんらかの質料的条件を指示するものであろう。いずれにせよ，こうした区別は『オプス・ポストゥムム』を理解する上で鍵となる重要な区別であるので，あらかじめ念頭においておきたい。

さて，内容的に一つのまとまりをもった全体を形成すべき諸経験の体系的統一，そうした体系的統一を可能ならしめる条件の究明は結局のところ，悟性のはたらきを超えた理性のはたらきの究明に向かうことになる。いいかえれば，体系的統一をなす全体としての経験の可能性を問うということは，理念との本質的な関係における経験の可能性を問うことに他ならない。『オプス・ポストゥムム』のうちに見られる「物質のあらゆる内的な運動力の絶対的な全体についての経験」（XXI 225）および，それに類した表現は，まちがいなく理念との本質的な関係における経験を意味している（なお『プロレゴメナ』には「もろもろの理性理念は…可能的経験の集合的統一に関わる」（IV 328）という文言も見られる）。

しかし，理念との本質的な関係における経験の可能性を問うとはどういうことか。なるほど，理念は経験と無関係なものではない。なぜなら理念は経験に対する「統制的原理」（A561/B589）として用いられることによって，経験的探究の方向を導き，経験的な発見の手引きとしてはたらくことが可能だからである。しかし，その場合，理念の対象はあくまで与えられる「かのように」（als ob）みなされるだけであって，現実に与えられるとみなすことはできない。いいかえれば，理念を経験の可能性の「構成的原理」として使用することは許されない。それが『批判』の弁証論の基本的メッセージである。

この問題を考える場合，そのヒントとなる表現もまた『オプス・ポストゥムム』のうちに見いだすことができる。カントは次のように言う。「〔移行があつかうのは〕同時に構成的であるような統制的原理〔である〕」（XXII 241）。これはけっして批判哲学の基本的立場の放棄ではない。なぜなら『批判』の分析論で論じられた悟性原則のうち，「経験の諸類推」について，すでにこうした特徴が語られているからである。すなわち，「経験の諸類推」は経験的に与えられた諸知覚を結合するアプリオリな形式を定めた原則として，個々の知覚にとっては単なる「統制的な原理」（A179/B222）にすぎないが，この原則によってはじめて経験の客観性が成立するという点で，それは同時に，経験にとっての「構成的原理」（A664/B692）である。このような考えに従うならば，〈多様な経験的諸認識の体系的統一をなす全体としての経験〉の可能性に関わる原理は，個々の経験的認識にとっては統制的であるが，同時に，体系的全体としての経験の成立にとっては構成的である，と批判哲学の立場にもとづいて正当に述べることができるであろう[7]。

五　「移行」の問題を解く鍵としての「汎通的規定の原理」

それでは多様な経験的諸認識の体系的全体としての経験を可能にする質料的条件，質料的原理とは，どのようなものであろうか。この問題を考えるための手がかりは，『批判』弁証論中の「純粋理性の理想（Ideal）」（A567/B595）と呼ばれる一章のうちに見いだすことができる。まず，この問題を考えるさいに，こうした質料的条件を問題にするということは，いいかえれば，その内容から見た経験の可能性を問題にすることに他ならないことを改めて確認しておきたい。そこで，カントが「経験」をどのように定義していたかを見ておこう。カントによれば，「経験とは……諸知覚を通じて客観を規定するような認識である」（B218）。ここで，経験によって認識される「客観の規定」のうち，物が現実存在するかぎり必ずもたなくてはならない規定，カントの表現では「物の現実存在に属する規定」（B225）は「実在性」（Realität）と呼ばれる。この実在性は伝統的には物一般の本質規定を意味するが，批判哲学では，現象的対象の現実存在に属する規定として，「感覚に対応するもの」（A143/B182）ないし「感覚の対象」（B207）を意味する。その現象的実在性の具体的な例としては，「光」「熱」「重さ」「重力」「不可入性」といった経験的諸事象が挙げられている（これらはすべて，経験的動力学としての物理学があつかう対象であることに留意されたい）。そこで，経験においてこれらの経験的実在性が述語づけられる客観とは，現実存在する「個々の物」（ein jedes Ding）（A571/B599）のことである。内容から見た経験の可能性を問題にするということは，こうした個々の物に関する経験の可能性を問題にすることに他ならない。

さて，個々の物に関する経験の本質的な特徴として，無限にまで可能なその多様性を挙げることができる。個々の物はなんらかの点で相互に区別され，この区別は無数の観点から可能であろう。これを経験の側から言えば，個々の物の経験においては，「物の汎通的規定」（durchgängige Bestimmung）が可能でなければならない，ということである。カントによれば，「個々の物はその可能性に関して，汎通的規定の原則に従う」（ibid.）のであり，その原則によれば，「物の可能な述語のすべてについて，各述語がその反対述語と比較されるかぎりで，どちらか一方が物に帰属しなくてはならない」（A572/B600）とされる。これはいいかえれば，個々の物の（完全な）認識は，その物をあますところなく規定し尽くすという仕方でのみ成立し，そのためには物のあらゆる可能な述語（ここでは，あらゆる実在性）がなんらかの仕方で与えられていなければならない，ということを意味する。こうした「汎通的規定の原理」が悟性の原理ではなく理性の原理であることは，言うまでもない。そして，この汎通的規定の原理は一つの「超越論的前提」を含み，それは「個々の物の特殊な可能性に対する与件（Data）をア

プリオリに含むべき，あらゆる可能性に対する質料」（A573/B601）という前提である，とされる。カントはこうした事態を次のように要約してみせる。汎通的規定の原理とは，「一つの物を完全に認識するためには，一切の可能なものを認識し，この可能なものによって，一つの物を肯定的にか否定的にか限定しなくてはならない」（ibid.）ということを言わんとする原理である，と。

ところで，一つの物を完全に認識するためには，物のあらゆる可能性に対する質料が前提されなくてはならない，という汎通的規定の思想のうちには，伝統的形而上学に由来する一つのロジックが含まれている。すなわち，「実在性」に属する述語を物に否定的に帰属させる場合，それはつねに実在性を前提し，実在性の「欠如」（A575/B603）ないし「制限」（A576/B604）としてのみ成立する，というロジックがそれである（カントは「闇」は「光」を前提し，「貧乏」は「富裕」を前提するという実例を挙げている（vgl. A575/B603））。カントはこのロジックに従って，「あらゆるものの汎通的規定の可能性に対する……質料」（ibid.）として「実在性の全体（All der Realität）」（ibid.）ないし「あらゆる実在性の総括（Inbegriff）の表象」（A577/B605）が前提されなくてはならないと主張する（これが結局「神の概念」（A580/B608）に他ならない）。その結果，この「あらゆる実在性の総括」という理念は「現実存在するものすべてに必然的に見いだされる汎通的規定の根底に存し，現実存在するものの可能性の最高にして完全な質料的条件を形成する」（A576/B604）のであり，「物のあらゆる多様性は，こうした最高実在性の概念を制限する，それだけ多くの多様な仕方にすぎない」（A578/B606）と結論される。

ここで「実在性の全体」ないし「あらゆる実在性の総括」という理念について，『オプス・ポストゥムム』の中心となるエーテル概念の内容およびその存在証明を理解する上で重要となる，その特性を三点ほど挙げておきたい。第一点は，個々の物が汎通的に規定されるためには「あらゆる実在性の総括」という全体がそれに先立って与えられていなければならないというロジック，要するに全体が個に先行し，個は全体のうちでのみ可能となるというロジックが成り立つのは，理性の諸理念中，「純粋理性の理想」だけである，という点である。なぜ，こうしたロジックがこの「理想」についてだけ成り立つのか。その理由は，この理念の対象が「個体」（einzel Wesen, Individuum）（A576/B604）だからである。カントの場合，こうした個体の認識は本質的に直観でなければならない（vgl. A713/B741）。とはいえ，「理想」を対象とするような直観は人間的な感性的直観ではありえず，知的直観でなければならないことは言うまでもない（だからこそ「理想」は人間理性にとっては理念にとどまる）。そして，この知的直観において「理想」は完全に認識されている，いいかえれば汎通的に規定されている（さもなければ知的直観ではありえない）。つまり，「あらゆる実在性の総括」という「理想」

は，知的直観においてアプリオリに汎通的に規定された対象だ，ということである。ここに知的直観のもう一つの特徴，すなわち「客観の現実存在に依存する」（B72）感性的直観ではなく，「直観自身によって直観の客観の現実存在が与えられる」（ibid.）ような「根源的直観」（ibid.）としての知的直観という特徴を考慮に入れるならば，知的直観の対象たる「あらゆる実在性の総括」はアプリオリに汎通的に規定され，かつ，そのことによって同時に，アプリオリに現実存在することになる。

言うまでもなく，このような論理構制が成り立つのは知的直観の場合だけであり，感性的直観の場合には成り立たない（感性的直観の場合，物は与えられるだけで，物の規定はもっぱら概念による）。にもかかわらず，エーテル演繹論において「物質のあらゆる可能な運動力の総括」としてのエーテルが，物質的個体の汎通的規定を可能にする条件であり，そのことによって同時にエーテルの存在が証明されたことになる，という論証の仕方を目の当たりにするとき，「純粋理性の理想」に見られる，こうした論理構制を想起せざるをえないのである。

ところで，全体が部分に先行し，部分は全体のうちでのみ可能となるというロジックは，じつは知的直観の場合だけでなく，感性的直観の場合にも成り立つ。空間（および時間）の純粋直観がそれである。すなわち，「〔空間の〕諸部分は一切を包括する統一的空間（einige allbefassender Raum）に，その構成要素として先行することはできず，ただその統一的空間のうちでのみ考えられる」（A25/B39）（カントはこうした特徴をもつ空間を，部分が全体に先立つ「合成体」に対立する「トトゥム」（Totum）（A438/B466）と呼ぶ）。具体的には，空間的な位置，方向，距離，上下左右の関係等々の規定はつねに，先行的に直観される全体としての空間のうちでのみ可能となる，ということである。後に詳しく見るように，エーテル演繹論では，エーテルと空間との本質的な関係がテーマとなる。その場合にも，こうしたロジックが重要な役割を果たすであろう。

「あらゆる実在性の総括」とい理念に関する第二の特徴は，第一の特徴を理念の内容面から見た場合に明らかとなる。この理念は，あらゆる実在性がそこに貯えられている貯蔵庫のようにイメージされがちであるが（じっさいカント自身が，それを「素材の全在庫」（A575/B603）と表現している），より正確には「諸事物の共通の基体」（A578/B606）であり「根源的存在者」（Urwesen）（ibid.）であって，多様な諸事物は「こうした根源的存在者のもつ最高実在性の制限にもとづくのではなく」（A579/B607），根拠としての根源的存在者から導き出されたもの，派生的存在者に他ならない（vgl. ibid.）。こうした特徴は，『オプス・ポストゥムム』であつかわれるエーテルの根本特徴とほぼ完全に重なる。この点は，体系的統一をなす経験的諸認識の全体たる物理学が，カントにより単なる分類体系ではなく，根本的原理からの導出体系をなすべき学として

考えられている（vgl. IV 467f.）ことと呼応している。すなわちエーテルは，そこからあらゆる運動力と物質のあらゆる種別的差異とが導出されるべき根本原理として，カントにより構想されているのである[(8)]。

「あらゆる実在性の総括」という理念に見られる第三の特徴は，他のすべての理念と同様，その対象が経験のうちに与えられるものではなく，したがってまた，この対象の現実存在は，この理念の内容や経験におけるそのはたらきにもとづいては証明されえない，という点である。この点は，この理念との内容上の密接なつながりを有するエーテルの現実存在を，なんらかのアプリオリな根拠にもとづいて証明しようとするエーテル演繹論の狙いと鋭い対照をなす。要するに，理念としての性格をもったエーテルが現実存在することを果たして証明できるのか，できるとすれば，それはどのような仕方でなのか，また，それはカントの批判哲学の内部で可能なのか，それとも批判哲学を超え出る必要があるのか，というカント哲学の根本に関わる重大な問題を孕んでいるのである。

話を戻して，汎通的規定をめぐる上述の事態を人間理性に「課せられた」課題として捉えずに，物自体の世界の存在構造を表わすとみなすならば，独断論に陥るわけだが，カントはこうした汎通的規定の原理そのものは承認し，いわばそれを換骨奪胎して，次のように現象的対象に適用している。

> ところで感官の対象が汎通的に規定されうるのは，この対象が現象のあらゆる可能な述語と比較され，これらの述語によって肯定的にか否定的にか表象される場合だけである。ところが，こうした述語のうち，（現象における）物そのものを形成するもの，すなわち実在的なもの（das Reale）は，与えられていなければならない。……だが，あらゆる現象の実在的なものが与えられているその場は，一切を包括する統一的な経験（einige allbefssende Erfahrung）である。したがって，感官のあらゆる対象の可能性に対する質料が，一つの総括のうちに与えられたものとして前提されなくてはならない。経験的諸対象のあらゆる可能性，それら相互の差異および，それら諸対象の汎通的規定は，こうした総括の制限にのみもとづく。……したがって，何ものも，それがあらゆる経験的実在性の総括をみずからの可能性の〔質料的〕条件として前提しないかぎり，われわれにとって対象ではない。
>
> （A581f./B609f.）

ここに見られるように，経験的対象についても汎通的規定が可能でなければならず，またその可能性の質料的条件として，「あらゆる経験的実在性の総括」が「一切を包括する統一的経験」のうちに与えられていなければならないのである。この「一切を包括する統一的経験」が〈多様な経験的諸認識の体系的統一をなす全体としての経験〉であ

ること，および「あらゆる経験的実在性の総括」が，こうした経験を可能にする質料的条件であることは，もはや明らかであろう。

ところで，上述の引用文中に見られる「経験的実在性」という表現を「経験的運動力」と読み替えるべきことは，動力学的自然哲学の立場に立つかぎり必然的である。なぜなら，すでに見ておいたようにカントは経験的実在性の実例として，光，熱，不可入性，重さといった，経験的動力学としての物理学があつかうべき諸性質を挙げており，また物質の種別的差異を諸々の運動力の多様性に求め，このような運動力の体系を構築することが，動力学的な自然哲学の最重要課題だからである。そうだとすれば，「一切を包括する統一的経験」を，『オプス・ポストゥムム』があつかう「物質のあらゆる内的な運動力の絶対的全体についての経験」（XXI 225）として読み替えることもまた必然的であろう。そして，このような意味での経験を成立させる質料的条件，質料的原理こそが，「あらゆる経験的運動力の総括」に他ならない。

以上のことから，『オプス・ポストゥムム』の「移行」があつかう問題を理解する上で，「汎通的規定の原理」および，これを論じた「純粋理性の理想」の章を参照することが，きわめて有効であることが判明したと思われる。しかし，これだけでは解決できない大きな問題がある。なるほどカントは『オプス・ポストゥムム』の前半部で，こうした「経験的運動力の総括」をエーテル（ないし熱素）に求め，このエーテルに備わる根源的な引力・斥力にもとづく連続的な振動運動によって，密度，凝集，流体性・固体性，弾性，熱，燃焼といった，物質の種別的差異に関わる諸性質ないし諸運動力を導き出す試みを行っているが，その場合，エーテル（ないし熱素）はどこまでも「仮説」（XXI 378）とみなされている。なるほどカントは，エーテルを「経験の対象ではなく，拡張的物質の理念である」（ibid.）とみなしはするものの，「それなくしては，いかなる凝集も……考えられない必然的な仮説である」（ibid.）と述べており，したがって，「凝集」という特定の経験的事象を説明するために仮定された存在である以上，エーテルの存在は経験を通じてしか検証されないであろう。だが，それでは，すべては経験的物理学に属することになり，形而上学的な媒介の学としての「移行」の構想は，砂上の楼閣として崩れ去ることになろう。エーテルの存在を経験的にではなくアプリオリな根拠にもとづいて論証しようとするなら，やはり「経験の可能性の条件」としてエーテルの存在を示す他はない。その試みが「エーテルの演繹」に他ならない。

六　エーテルの演繹論

『オプス・ポストゥムム』の英訳版の編纂者 E. フェルスターによれば，エーテルの演繹論は 1799 年の 5 月から 8 月という比較的短い期間に執筆され，カント自身によって

「移行 1-14」と名づけられた草稿群のうちに展開されている[10]。だが，そうした草稿群のうち，エーテルの存在証明の核心的部分として指摘できるような特定の箇所は見当たらない。少なくとも『批判』第二版の「観念論論駁」（B274f.）における外的事物の存在証明に類した仕方で，明確なかたちでエーテルの存在証明が述べられている個所はない。むしろ，エーテルの存在を論証するさいの諸論点が未整理のまま，似たような証明の試みが何度も繰り返されていると言ったほうが真相に近い。そこで，まずエーテルの存在証明の最初の試みと思われる「移行 2」の「第一命題」（XXI 218）の論述内容の大筋を以下に引用し，その解釈に必要なかぎりで，他の箇所をも引用することにしよう。

第一命題

物体が同一の空間を〔その物体を構成する〕物質で充実するさい，その物質の量に違いがあるかぎり，そこには物質の〔種別的〕差異が見られる。このような物質の差異は原子論的に，充実体とそのあいだに存在する空虚との合成によって説明することはできない。なぜなら，空虚な空間は可能的経験のいかなる対象でもないからである（というのも，実在的な対象の非存在の知覚は不可能であるから）。……

したがって，宇宙空間は全面的に物質で充実している……と考えられねばならない。……経験的直観〔すなわち知覚〕の対象である経験的空間はそれ自身，物質の運動力の総括である。〔この総括としての〕根源的元素〔エーテル〕は，……いかなる仮説的な事物でもなく，またいかなる経験の客観でもないが，それでも実在性をもち，その現実存在を要請することができる。なぜなら，このような宇宙元素（Weltstoff）およびその運動力を想定することなしには，空間はいかなる感官の対象（Sinnenobjekt）でもないからである。……このような根源的元素について，われわれはただ，空間のうちに広がり，すべてに透入する運動力を考えることができるだけなのだが，その現実性は経験に先立ってアプリオリに，可能的経験のために要請することができる。（XXI 218f.）

さしあたり確認できることは，ここでは物質の種別的差異をどのように説明するかが問題となっている，という点である。ここにエーテル演繹の問題意識が『原理』の「動力学に対する総注」の延長線上にあることを，はっきりと確認することができる。少なくとも直接的には，『原理』本論の書き換えや『批判』の原則論の修正が意図されていたわけではない[11]。

さて，この引用文がエーテルの存在を論証しようとしたものであるとみなした場合，エーテルが理念であるか否かという論点を別にしても，この論証には二つの飛躍があると思われる。一つは，空虚空間が知覚不可能であることから，知覚可能な空間は物質で

充実されていなければならないことを認めたとしても，だからといって，その空間充実物質がエーテルという特殊な物質に限定されることまでは結論できない，という点であり，もう一つは，仮にこの空間充実物質がエーテルという特殊な物質であったとしても，そのことから，このエーテルが物質のあらゆる経験的な運動力の総括としての根源的物質でなければならないことまでは帰結しない，という点である。以下，それぞれの問題点について検討しよう。

まず，第一の問題点について。空虚な空間が知覚不可能であるのは何故だろうか。その根拠は，「知覚のあらゆる対象には……内包量すなわち感官への影響の度が付与されなくてはならない」（B208）という，『批判』の「知覚の予料」原則にある。すなわち，いかなる物質も，それが現実存在するかぎり，感官への影響力ないし作用力をもち，そのことによって知覚の対象になりうるのだが，空虚空間は物質がまったく存在しない空間として，感官への影響度はゼロであり，ゆえに空虚空間は知覚の対象とはなりえず，したがって知覚可能な空間は物質で充実していなくてはならないのである。しかも「知覚の予料」原則はアプリオリに確立した原則であるから，知覚可能な空間が物質で充実した空間であることもアプリオリに確実である。しかし，空間を充実する物質の種別については，この原則は何も定めていない。むしろ，どんな物質も空間充実体でなければならない。では何故カントは，ここでの空間充実物質をエーテルという特殊な物質に限定できたのであろうか。それは，上記引用文中には示されていない，以下のような事態をカントが念頭に置いていたことによる。

じつはカントは，空虚な空間がすべて知覚不可能であるとは言っていない。たとえば次のような文言が見られる。

> （重力による）万有引力は，空虚な空間を隔てて引き合うが，その意味するところはただ，あいだに存在する物質の仲介によることなく物体を引くということにすぎず，したがって，あいだに存在する物質は，そのことになんら関与しておらず，ゆえに〔あいだの〕空間は相対的に空虚とみなされる，ということである。（XXI 228）

> 〔知覚可能な〕空間はただ相対的にのみ空虚と考えられる。なぜなら非存在は知覚できないからである。（XXI 558）

つまりカントによれば，同じく空虚な空間といっても，絶対的に空虚な空間と相対的に空虚な空間との区別があり，前者は知覚不可能だが後者は知覚可能だということである。そして相対的に空虚な空間としてカントは，万有引力がはたらく宇宙空間を考えている[(12)]。要するに相対的に空虚な空間とは，直接知覚の可能な通常の物質がまったく

存在しない空間を意味し，とはいえ，そこにはエーテルという特殊な物質が存在しなければならない（それゆえにエーテルは直接知覚の対象ではない），というのがカントの主張なのである。

では，エーテルで充たされた空間が存在しなければならないというカントの主張の根拠は何か。カントは次のように述べる。

> 空間が一般に（測定や方向づけといった）可能的経験の対象となるのは，遍く広がり……運動力を備えた宇宙元素によるのであり，〔したがって〕こうした宇宙元素の現実性は，外的経験の可能性の原理にもとづいている。（XXI 229）

> ……，知覚によって感官に示される隔たり（Abstand）は，あいだに存在する物質〔エーテル〕を介してのみ可能的経験の対象となりうる。こうした〔可能的経験の対象となる〕隔たりに対して，絶対的に空虚な空間は端的にいかなる対象でもない。（XXI 563）

ここで言われていることは以下のような事態を指していると思われる。われわれは外的諸対象を知覚するさい，つねにそれらの位置や間隔，上下左右，奥行き，さらには運動といった空間的諸関係を同時に知覚しており，しかも，こうした空間的諸関係を一つの全体としての空間のうちに秩序づけられたものとして知覚している[13]。要するに，外的諸対象の知覚が可能となるためには，全体としての空間がそれとともに知覚されていなければならない，ということである。外的諸対象が知覚されるとき，つねに同時に空間全体が背景として知覚されていなければならない，と言ってもよい[14]（ここに，全体が部分に先立ち，部分は全体のうちでのみ可能となるという，かのロジックが純粋直観としての空間についてのみならず，知覚の対象としての空間についても成り立つことを読み取ることもできるだろう）。そして，この空間そのものの知覚を可能にする物質的条件が，感官への作用力をもつエーテルの存在だ，ということであろう。

ここに見られる空間そのものの知覚がエーテルという物質を条件としてはじめて可能となるという論点は，『批判』の「経験の諸類推」原則中の第一類推における，「時間そのものの経験的表象の基体としての恒存的なもの（das Beharrlich）」（A183/B226）の概念を想起させる。たしかにエーテルと「恒存的なもの」とのあいだには，経験の可能性の条件という観点から見て，きわめて類似した特徴が見られる。エーテルは一つの空間を知覚するための条件であり，空間的諸関係の知覚を可能にする条件である。これに対して「恒存的なもの」は一つの時間を経験的に表象するための基体であり，経験的時間規定の基体である。しかし，両者の決定的な違いを見過ごすこともできない。先に触

れた「観念論論駁」によれば，時間における私の現実存在の規定は，「知覚におけるなんらかの恒存的なものを前提する」（B275）が，「この恒存的なものは，私の外なる物によってのみ可能となる」（ibid.）。したがって，恒存的なものが空間のうちに現実存在しなければならないのだが，この恒存的なものとして指定されるのは，太陽の日周運動に関する「地上の諸対象」（B278）がその実例として挙げられているように，通常の外的事物であって特別な存在者ではない。これに対してエーテルは特別な物質的存在者である。この決定的な違いは結局のところ，恒存的なものが経験の形式的条件に属するのに対し，エーテルが経験の質料的条件に属する，という原理的な区別に由来すると思われる[15]。

さて話を戻すと，絶対的に空虚な空間の知覚不可能性から知覚可能な空間がエーテルという特殊な物質で充たされていなければならないという結論を導くさいに見られた当初の飛躍は，外的対象の知覚がつねに空間そのものの共知覚を前提するという事態を介在させることによって解消することができた。

次に，第二の問題点について。それは，空間充実物質がエーテルという特殊な物質であることを認めたとしても，そのことから，このエーテルが物質のあらゆる経験的な運動力の総括としての根源的物質でなければならないということまでは結論できない，という点であった。この問題は次のように言い替えることもできる。空間充実物質としてのエーテルと，物質のあらゆる運動力の総括としてのエーテルという二つのエーテル概念は，いかにしてその同一性が示されるのか，と[16]。

この問題に答えることは一見，容易であるように見える。というのも，空間充実物質としてのエーテルの存在を導く論拠となっていたのは，エーテルが感官への影響力ないし作用力をもち，そのことによって空間の知覚を可能にする条件となる，という事態であったからである。つまりエーテルは重力以外の物質のあらゆる運動力を生み出す「基盤」（Basis）として，根源的な運動力をもつものであり，その一つのはたらきとして感官への作用力をもつと言えるから，そのことによって上記二つのエーテル概念の同一性が示されたことになる，ということである。

しかし，事態はそう単純ではない。感官に作用し知覚を生み出す運動力とは結局のところ，われわれの認識能力との関係において考えられた力であり，これと，物質の種別的差異を生み出し物体を形成する力であるところの根源的運動力とは，たがいにきわめて異質な力であって，こうした二種類の異質な力の担い手が同一の物質であることは，上述の論証中には示されておらず，むしろ，あらかじめ前提されているとしか思われないのである。

知覚を生み出す運動力と物質の種別的差異を生み出す運動力という，二種類の異質な力の担い手が同一の物質であることは，いかにして示されるかという問題は次のように

表現できるかも知れない。一方における知覚を可能にする条件と他方における体系的全体としての経験を可能にする条件とが同一であることは，いかにして示すことができるのか，と。

この問題を考えるためには，まず知覚を可能にする条件と，体系的全体としての経験を可能にする条件との違いを，より詳しく見ておく必要がある。この二つの条件をともに質料的条件とみなすことは正しい。しかし，その質料的条件の意味するところは両者で異なっている。知覚の場合，判断の形式で示される個々の経験の内容をなすものが諸知覚であり，これらの知覚そのものは感官への外的事物の触発によって可能となる。したがって，この外的事物の感官への触発力ないし作用力が，知覚そのものの可能性の質料的条件であり，そのなかでも特に空間全体を知覚の対象として可能にする質料的条件がエーテル（の触発力）である。他方，体系的全体としての経験の場合，その内容ないし素材をなすものは，諸々の経験的運動力であり，これらの経験的運動力が偶然的に寄せ集められた集積としてではなく，一つのまとまりをもち，たがいに関連づけられた全体として与えられることを保証するものが，あらゆる経験的運動力の総括ないし基盤としてのエーテルである。その意味でエーテルは，体系的全体としての経験（つまり物理学）の可能性に関する質料的条件であると言える。

こうして見てくると，やはり上述した二つのエーテル概念の同一性を論証すること，ひいては知覚と体系的経験とのあいだを繋ぐことは困難であるようにみえる。しかし，カント自身，明確にそれと自覚しつつ述べているわけではないにせよ，この二つのエーテル概念を結びつけるための鍵となりそうな文言を，エーテル演繹論の論述中に見いだすことができる。

> 一切を包括する一なる経験の客観は，そのうちに，主観を動かす力を，つまり感官を触発し，諸知覚を生み出す物質の力を含み，この力の全体が熱素と呼ばれる。ただし，熱素がそう呼ばれるのは，こうした力による全般的な励起の基盤としてであるが。そして，こうした力による励起によってあらゆる（物理的）物体が，それとともに主観そのものが触発される。（XXI 578）

この引用文から読み取ることのできる一つの重要なメッセージは，エーテルが物体に及ぼす力と主観に及ぼす力とが同一のものだ，ということである。いいかえれば，主観なるものは，ここでは一つの物体とみなされている。こうした主観を〈身体的主観〉と呼んで差支えないであろう。この点は，別の箇所でさらにあからさまに，「外的経験そのものは，（物理的な物体としての）主観を動かす物質の運動力によって可能となる」（XXI 574）と述べられていることから読み取ることができる。ただし，通常の物質が

主観を触発する仕方と，エーテルが主観を触発する仕方とは異なる。この点は以下の文言から理解できる。

> 空間を充実しはするが，直接的には可能的経験の対象とはならないもの（このものがなぜ可能的経験の直接的対象とはならないかというと，それは，このものがあらゆるものに透入し，したがって，いかなる感覚器官に対しても接触によって作用するわけではないからである），それは熱素である。（XXI 562）

つまり通常の物質が感覚器官への接触によって作用し，そのことによって知覚の直接的な対象となるのに対し，エーテルの感覚器官への作用は，身体的主観に透入し，いわばその内部から「活性化する」（agitieren）という仕方で行われ，それゆえに知覚の直接的な対象とはならない，ということである[17]。

ここに，一方では空間そのものの共知覚を可能にし，他方では物質のあらゆる経験的運動力の体系的統一を可能にする，それぞれの質料的条件が，同一の物質による，あらゆるものを励起させ活性化する根源的運動力という同一の力であることを確認することができた。このことによって，これまで問題にしてきた二つのエーテル概念の同一性が論証され，ひいては知覚と体系的全体としての経験とのあいだを繋ぐことができたように思われる。

以上，論述してきたことによって，多様な経験的諸認識の体系的統一をなす全体としての経験（すなわち物理学）を可能にする質料的条件としてのエーテルの存在を，アプリオリな根拠にもとづいて論証するというエーテル演繹論の試みに対して，その論証を首尾一貫したものとして解釈しうる道筋を示しえたように思われる。しかし，やはり問題は残る。第一に，エーテル演繹論の論証を妥当なものとみなした場合，それは，理念の対象としてのエーテルが「理念の外に現実存在する」（XXI 559）という結論を認めることになる。しかし，この結論を批判哲学の内部にとどまったまま，承認することが果たしてできるだろうか。この結論を承認して批判哲学を超え出るか，さもなくばこの結論を否定して批判哲学にとどまるか，二つに一つではないだろうか。

第二に，上述したように身体的主観という概念は，エーテル演繹論を首尾一貫したものとして解釈するさいの鍵となる概念であるが，この身体的主観という概念についても，それが批判哲学の枠内に収まる概念であるか否かが問われるであろう。しかし，こちらの場合は，理念としてのエーテルの場合とは異なり，批判哲学の枠内に十分収まりうると考えられる。そもそも主観が本質的に身体的なものであることは，すでに『批判』の感性論のうちで示唆されていた。それは空間の「形而上学的究明」において，「諸々の

感覚が私の外なる或るものに関係づけられるためには（いいかえれば，私がそこに存在する空間の場所とは別の場所にあるものに関係づけられるためには），……空間の表象がすでに根底に存していなければならない」（A23/B38）と述べられていることから明白に読み取ることができる。空間のどこかの場所に存在する私とは，明らかに身体的主観としての私でなければならないからである。ただし，ここでの論述は，空間がアプリオリな表象であることを示そうとしたものであり，この点は『オプス・ポストゥムム』における背景としての全体空間の知覚可能性とは齟齬するように見えるが，批判哲学の内部で十分両立可能であると思われる。いずれにせよ，身体的主観を強調することは，動力学的な力による諸物体の相互作用の場のただ中に主観を置き入れることを意味し，それは批判哲学のうちに，心身問題をはじめとするさまざまな問題を引き起こすとともに，新たな哲学的展望を開くことになると思われるが，カント自身はエーテルの演繹論以降，『オプス・ポストゥムム』において，「主観の自己定立（Selbstsetzung）」（XXII 12）や「実践的自己定立と神の理念」（XXII 115）といったテーマに没頭することになる。このようなテーマとエーテル演繹論とがどのように関係するのか，それとも関係しないのか，こうした問題については他日を期したい。

《注》

『純粋理性批判』からの引用は，慣例に従って第一版をA，第二版をBで示し，それ以外の著作からの引用はアカデミー版の巻数をローマ数字で示す。また引用にあたっては，筆者による挿入句を〔 〕で示した。なお本稿は2018年7月1日に開催された京都ヘーゲル読書会例会で口頭発表した内容を大幅に加筆修正したものである。

（1） 今回，参照した主な文献を以下に掲げておく。E. Adickes, *Kants Opus postumum,* Berlin 1920. B. Tuschling, *Metaphysische und transzendentale Dynamik in Kants Opus postumum,* Walter de Gruyter 1971. B. Mathieu, *Kants Opus postumum,* Vittorio Klostermann 1989. M. Frieman, *Kant and the Exact Sciences,* Harvard UP 1992. J. Edwards, *Substance, Force and the Possibility of Knowledge,* University of California Press 2000. E. Förster, *Kant's Final Synthesis. An Essay on the Opus postumum,* Harvard UP 2000. D. Emundts, *Kants Übergangskonzeption im Opus postumum,* Walter de Gruyter 2004. B. W. Hall, *The Post-Critical Kant. Understanding the Opus postumum,* Routlege 2015. 三宅剛一『学の形成と自然的世界』みすず書房，1973年。坂部恵『理性の不安』勁草書房，1976年。加藤泰史「オプス・ポストゥムムと批判哲学の間」『カント全集別巻　カント哲学案内』岩波書店，2006年，359-406ページ。犬竹正幸『カントの批判哲学と自然科学』創文社，2011年。

（2） 犬竹正幸「純粋自然科学と経験的自然科学の間 ──『自然科学の形而上学的原理』から『オプス・ポストゥムム』へ ──」松山・犬竹（編）『現代カント研究4　自然哲学とその射程』晃洋書房，1993年，243-276ページ。

（3）『オプス・ポストゥムム』のうちには「エーテルの演繹」という表現は見当たらないが，その代わりに「熱素の演繹」（XXI 586）という表現が見られる。カントの場合，物理学的な概念としての「熱素」と「エーテル」とは区別されるが，経験の可能性の条件としてアプリオリな性格を賦与された場合には，両概念は実質的に同義的に使用されている。そこで本

稿では（大方の『オプス・ポストゥムム』の研究者と同様），「エーテルの演繹」という表現を採用する。

（4） Vgl. G. W. Leibniz, *Specimen Dynamicum,* 1695, 横山・長島訳「物体の力と相互作用に関する驚嘆すべき自然法則を発見し，かつその原因に溯るための力学提要」『ライプニッツ著作集3　数学・自然学』工作舎，1993年，491–527ページ。

（5） 1798年のChr. ガルヴェ宛書簡およびJ. G. キーゼヴェッター宛書簡（XII 257f.）を参照。

（6） こうした区別は『批判』のうちにも見られる。「われわれは悟性の経験使用における配分的統一を，経験全体の集合的統一へと弁証的に転化し……」（A582/B610）とか，「悟性が客観における多様なものを概念によって統合するのと同様に，理性は多様な諸概念を理念によって統合する。それは理性がある種の集合的統一を，悟性のはたらきの目標として立てることによってである。悟性は通常は配分的な統一にのみ従事している」（A644/B672）といった文言がそれである。

（7） ここで『オプス・ポストゥムム』と『判断力批判』との関係について私見を述べておきたい。反省的判断力の原理が「自然の種別化の法則」（V 186）とも呼ばれるように，『判断力批判』のテーマが『オプス・ポストゥムム』のそれと重なる面をもつことを否定することはできない。しかし，反省的判断力はあくまで主観的な「自然の判定」（V 412）の能力として，自然の規定的認識には関わらない以上，両者のテーマには根本的な相違があると考える。

（8） カントはエーテルのこうした根本性，根源性を強調するために，『オプス・ポストゥムム』では「総括」よりも「基盤」（Basis）という表現を多用しているが，1770年代の半ばに書かれたと推定される覚書では，「エーテルは……あらゆる物体の母胎（Gewahrmutter）である」（XIV 295）とも記しており，この「母胎」という表現の方が，あるいは適切かも知れない。

（9） Vgl. A169/B211, A173/B215, A176/B217.

（10） Vgl. E. Förster (ed.), *Immanuel Kant. Opus postumum,* Cambridge UP 1993, S. xxvii.

（11） 『オプス・ポストゥムム』が『原理』の書き換えを意図したものだとする解釈はB. トゥシュリンクに見られ，『批判』の原則論の修正を意図したものだとする解釈はJ. エドワーズ，B. W. ホールに見られる。Vgl. B. Tuschling, *a. a. O.,* S. 31f., J. Edwards, *a. a. O.,* S. 147ff., B. W. Hall, *a. a. O.,* S. 36ff.

（12） 90年代に書かれたと推定される覚書には，絶対的に空虚な空間と相対的に空虚な空間との区別に関する，次のような文言も見られる。

> もしも空間中の物質が他のいかなる物質とも接触せず，また，重さ〔つまり重力〕ももたないとしたら，そのような空間は絶対的に空虚な空間であろう。
> ……絶対的に空虚な空間とは，そのうちで諸実体のいかなる相互作用も見られない空間である。〔これに対して〕相対的に空虚な空間とは，そのうちで不可入性による相互作用〔つまり接触による近接作用〕が見られない〔が，重力のような遠隔作用が見られる〕空間である。（XIV 460, 挿入引用者）

ここでは，二種類の空虚な空間の区別が，物質間の二種類の相互作用に関係づけて考えられている。すなわち，そのうちで一切の相互作用がはたらいていない空間が絶対的に空虚な空間と呼ばれるのに対して，重力のような遠隔的相互作用だけがはたらいている空間が相対的に空虚な空間と呼ばれている。

しかし，なぜ遠隔作用だけがはたらいていて近接作用がはたらいていない空間は，相対的に空虚な空間と呼ばれるのであろうか。それは次のような理由によると考えられる。純粋に物理学的な考察レベルに立つかぎり，遠隔作用としての重力だけがはたらいている空間と，

いかなる相互作用もはたらいていない空間とのあいだに，本質的な違いはない（ただし，重力を「場」の作用として捉える現代物理学の立場に立つ場合には，話は別である）。いいかえれば，物理学的な考察レベルに立つかぎり，相対的に空虚な空間と絶対的に空虚な空間との区別は無意味なのである。両空間の区別が意味をもつのは，やはり空虚空間の知覚可能性をめぐる批判哲学的ないし認識論的な考察レベルにおいてである。

(13)　ここで，運動と空虚な空間との関係について，あるいは生じるかも知れない誤解を防ぐために，以下のようなことを述べておきたい。

「空虚な空間における物質の運動は可能的経験のいかなる対象でもない」（XXI 223）とカントは語る。この一文だけに注目するかぎりでは，カントはここでニュートン的な絶対空間を問題にし，こうした空虚な絶対空間における物体運動の経験不可能性を主張しているのだと解釈できるように思われる。事実，カントは『批判』のうちで，すでに「無限な空虚空間における世界の運動や静止……といった規定はけっして知覚されない」（A429/B457 Anm.）と述べて，「世界の外なる空虚空間」（IV 563）に対する物体の（絶対）運動を否定している。上記引用文がこうした事態をも指していることを否定するつもりはない。だが，カントがここで問題にしている空虚空間は，それ以上に，「世界のうちなる空虚空間」（ibid.），たとえば重力に支配されている二つの天体間の空間なのである。この点は，「感官の一つの対象から別の対象への〔知覚の〕移行は，あいだに空虚が存在する場合には経験不可能である」（XXI 229）とか，「われわれが近くにあるものや遠くにあるものの存在を知るためには，二つの点のあいだの空間が充実されていると前提する必要がある」（XXI 220）といった文言からも読み取ることができよう。要するに，カントがここで問題にしているのは，物体運動についての客観的な経験の前提となる，位置や距離，方向といった空間的諸規定の知覚そのものの可能性および，その質料的条件なのであって，物体の運動経験の客観性を成立させる形式的条件を問題にしているのではない，ということである。後者の形式的条件の究明は『原理』，とりわけその「現象学」章において十分に遂行されている。以上の点については，犬竹正幸，前掲書，第五章，第六章を参照。

(14)　外的諸対象が知覚されるとき，つねに同時に空間全体が背景として知覚されていなければならない，という事態を理解するために，ゲシュタルト心理学における「図と地」の概念が助けとなるかも知れない。それによれば，「図と地の対比は，『もの』（thing）と『非―もの』との対比の意味をもち，図は地の『上』にあり，地は図の『下』にも連続的に続いているように見える」のであり，「地」すなわち空間全体は「図」すなわち外的事物の知覚にさいして，つねに同時に知覚されている，ということである。廣松渉他（編）『岩波哲学・思想事典』岩波書店，1998 年，項目「図／地」を参照。

(15)　B. W. ホールは『オプス・ポストゥムム』，とりわけエーテルの演繹論が，『批判』の第一類推すなわち「実体性の原則」との密接な関係を有するという見地に立って，厳密な論考を展開しているが，「恒存的なもの」が経験の形式的条件に属するのに対し，エーテルが経験の質料的条件に属するという原理的な区別に関して，なお十分な説明を与えていないように思われる（vgl. B. W. Hall, *a. a. O.,* S. 73ff.）。

(16)　空間充実物質としてのエーテルと，物質のあらゆる運動力の総括としてのエーテルという，二つのエーテル概念の区別にもとづいて，エーテル演繹論の錯綜した議論を解きほぐしてゆくという戦略は，D. エムンツの論考から教えられた（vgl. D. Emundts, *a. a. O.,* S. 179ff.）。

(17)　この点は以下の文言のうちに，より明確に示されている。「経験のための素材をなす外的知覚はそれ自身，〔エーテルという〕物質の活性化する力によって主観のうちに生じた結果に他ならない」（XXI 573）。

（原稿受付　2023 年 6 月 16 日）